

レニンググラードの友

一九六七年八月モスクワにおける国際数学者会議の出席のため、はじめてソ連を訪れた私は、モスクワ北郊のオスタンキノホテルの粗末な一室に八月十一日から約二週間を過した。

国際数学者会議（ICM）の終った翌日、八月二十七日の正午近く私はレニングラード行きの特等車の片隅に自分を見出し出した。レニングラード大学および科学アカデミーの招待で、レニングラードへ行こうというのである。行けども行けども平坦な落葉樹林、その風景は、幼少のころを送った日本の北海道の風景をおもわせるのであった。というのは、自然の風景だけではなく、そこに散見する木造の農家のたたずまいもあまりにもよく似ているのである。

夕暮になってレニングラードのモスクワ駅についたとき、例によって手荷物が多い私はプラットホームに立ってポーターをさがすほかはない。そのうちがん丈な体格の大男のリニィック教授が二人の若い青年とともにあらわれて仕末してくれた。そして、いっさいの世話をこまごまとしてくれた。レニングラードの街を、リニィック教授は何度も自慢して手紙に書いてよこした。昔のロシア文学で何度も読んでただ空想だけしていた北国のこの町に、いま招かれているのだ、と思うと、横浜からナホトカまでの船旅、ナホトカからハバロスクまでの十七時間の汽車の旅、そしてハバロス

クからモスクワまで八時間の無着陸の航空、というシベリア經由の遠い旅程の労苦をさえ忘れるほどであった。

リニック教授は、早くからわが国では整数論の研究者として知られていたが、のち統計学に転向された。氏は、インド研究所に滞在されたこともあったそうであるが、私とは行き違いになり私との交友は一九六五年、バークレイで会ってからのことである。第五回バークレイ・シンポジウム のとき、氏は有名なバーレン・フィッシャーの問題について重要な結果を発表した。

それは小手先を器用に利かして、なんとか近似的に解を与えて実用に堪えればよいといういき方ではない。論争の長く続いたこの問題を数学の問題として追求することによって、問題の本質をあきらかにしようとするものである。いわく、「不完備な指数分布関数族に対して、相似不偏検定および不偏推定を記述するための主要な解析的器具は、正則関数のイデアル論とこれに関する解析的層の理論から得られる」。おそらくフィッシャーのような不世出の学者がかりに誤まりをおかしたとしても、それは単純な誤まりではあるまい。そこには必ずや深い問題が秘められているだろうと私どもは想像していた。この点からみても、リニックの接近方法の本格的なことには共鳴を覚えな いわけにはいかなかった。

リニック教授の勤めるアカデミー数学研究所は、有名なホントタンキにある。新築移転の予定だそう、設備のきわめて質素な研究所である。私とともにモラン教授（オーストラリア国立大学）

とスタイン教授（スタンホード大学）がここに招待されて、三人は約一週間滞在することになった。モラン氏は集団遺伝学における数学的方法について、スタイン氏は許容性の問題と多変量解析について、私は自動資料解析について、それぞれ二回ずつ計六回のセミナーをもった。リニィック教授を中心とする数理統計学の研究者のグループは、意外とも思われるほど多数である。そのセミナーの特徴は、一語一句も聞きもらさず、少しでも不明なところは残さないように、聞きとろうという態度である。彼らの勉強の仕方の特徴的なことは、これぞと思うと外国語の論文や著述は片端から翻訳してかかるという旺盛な吸収欲と勤勉な努力である。

これらの諸点を総合してみると、第一にソ連の数理統計学者は、数学的な素養のもちかたにおいては、米英の数理統計学者の水準より高いものがある。第二に多数の人材を養成してかかるという計画性がある。さらに第三に外国に学ぶという点において謙虚であり用意周到である。私は思うのであるが、米国、英国、インド、日本などの諸国とくらべてみたとき、これらの諸国の数理統計学者が、数学的素養を一段と高めておかないと、やがて数理統計学の深いところの理論は、この方面ではいままでは後進国ではあるが、将来はソ連学者の開拓によることになりはしまいかと。ソ連の確率論の伝統はいうまでもないが、そのうえサイバネティクスにおけるソ連の研究の底深さから、統計学にも本格的な発展の素因が与えられるという有利さも見逃しがたい利点である。

滞在一週間、レニングラードでは、リニィック教授の世話で有名な史蹟、博物館、公園、図書館

などの見学も忙しくかつ楽しかった。八月二十八日の日曜日には有名なレニングラード市立図書館を案内してもらって、レーニンの勉強した部屋もみせてもらった。日曜日に理工医農系の図書閲覧室で専門書を読みふける満席の市民の勉強ぶりに驚いた。レニングラードの街の美しい夕陽をネバ河畔で見ながら、この街を九百日、独ソ戦のとき守り抜いた市民の気持を思ってみた。科学アカデミー会員であるリニツク教授の別荘へも招かれた。モスクワから四十分ぐらいドライブ。静かな木立にかこまれた広い区劃のなかに木造の、大きいがしかし恐ろしく質素な建物であった。

九月二日午後十一時四十五分、モスクワを経て一路帰国の途につく私を、レニングラードのモスクワ駅へ送ってくれたのは、リニツク研究室の二人の若い研究者であった。彼らは私の重い荷物を肩にかけて運んでくれた。最後の話は、彼らが読んだという芥川竜之介の小説についてであった。衣食住いずれについても、慎ましやかな生活のなかに、レニングラードの若い学徒たちは学問の道にいそしんでいる。北緯六十度の北国のながい冬はどんなものであろうか。北国に育ったわたくしも実は想像しかねる。この静かな環境のもとに、ロシア文学を育んだあの土地には、数理統計学の本道を築こうとするレニングラード学派がいる。彼らは何か奥深く問題の本質をつきとめて理論を展開してゆこうとしている。わが国にくらべると何か根本的にちがったものを感じさせる。彼らの存在に対して、私たちはこれからいつも注目の眼をはなすことはできないであろう。